

「面瀬小学校は創立以来百四十年とは」

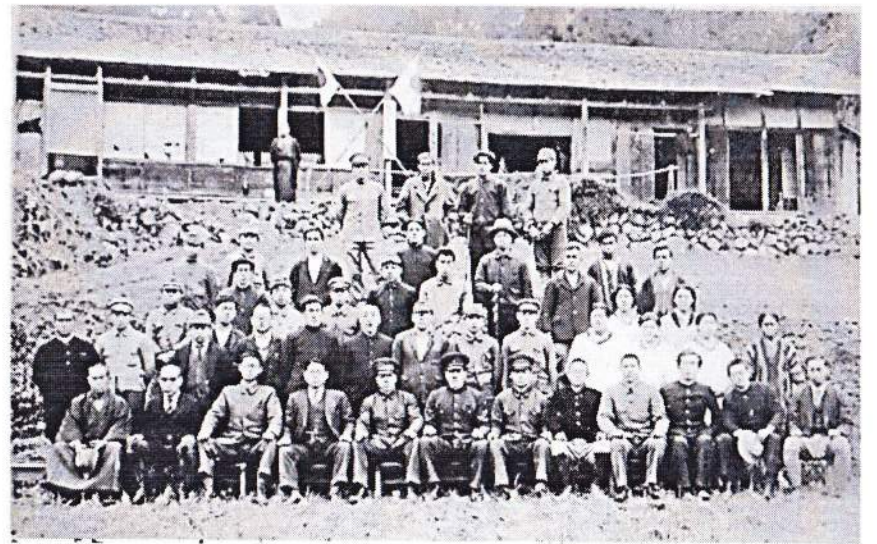
明治新政府による「学制」発布の翌年、明治六年（一八七三年）には直ちに全国各地の各県内に小学校（小学もしくは学校）が設置、創立された。驚くことは一気に全国に何万もの学校が創設されたことだ。江戸幕府から明治政府に変わって6年間で政府の方針（一村一学校）が全国津々裏々に徹底したことだ。それは明治新政府の権力威光というより、江戸期から庶民には学問への民度が高く、寺子屋通いはあまりにも知られている。このような素地をもとに明治六年には当地方にも小学校が創立した。

さて、面瀬小学校は昭和五十九年に松岩小学校の学区であった尾崎、赤田、高谷、鶴巻、上沢と階上小学校の学区であった下沢、上沢一区、上沢二区、上沢三区（後年、一部青葉ヶ丘として分区）、千岩田各地区計十地区をあわ

せ新学区として、在住学齡児童を開校新入学、編入学させたものである。また、この計画は仮称・第二小学校として昭和五十六年二月頃から促進委員会が発足している。よって本年、平成二十五年は開校から三十年となる。しかし、明治の学制施行から考えると当然ながら、この学区内にも明治時代に小学校はあった。その明治からあった小学校を面瀬小学校の前身と考えて何か遺漏でもあろうか。ただ後年、松岩小学校、階上小学校に途中編入されたことは間違いなく、学校沿革からすると途中は途絶えたものと考えてよい。途絶えたのだが、昭和五十九年に奇しくも復校したのであると考えれば開校創立百四十年といってもよいのであろう。当たり前だがこのことは気仙沼市内のほとんどの小学校にも言えることは確認しておきたい。

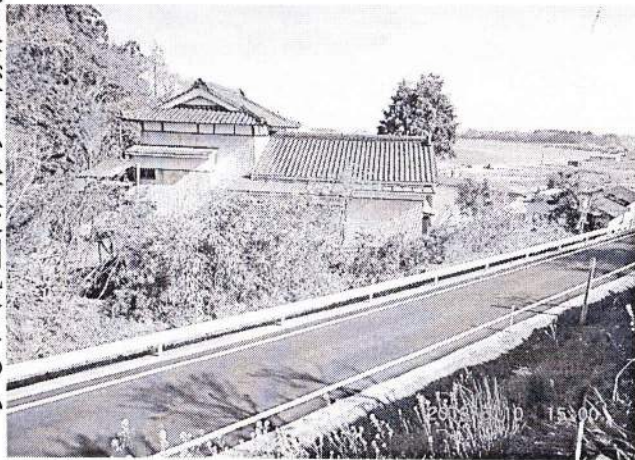
まず明治期松崎村（明治八年、赤岩村と合併して松岩村となる。）に明治六年「二本松小学校」が開設される。松岩郷土誌略年表（牧野珪舟氏編）によると「明治六年二本松小学校（上沢の一農家）」とある。これは現在の上沢地区、大萱、金取の学童が学んだ学校であろうか。平成二十五年四月十七日に岩月村のことについてお話を伺いに訪ねた小野寺正様（階上村誌を編纂

した小野寺菊治氏・旧階上村村長のお孫さん）から父上は二本松小学校を卒業していると聞きし、その偶然に驚いた。二本松小学校は大正三年に松岩小学校に併合された。松崎小学校は、「改訂・水沢縣下小学校開設について」（元本吉地方教育長部会長・菅原俊彦氏著・平成二十年発行）によると、松崎村に明治六年、松崎小学校として創立され、現在の松岩寺地内に立地したとある。松崎小学校には旧松崎村（二本松小学校児童以外）の子弟が学んだものと思われる。現在の面瀬地区でいうと尾崎、片浜、赤田、松崎五駄鱈、松崎柳沢、鶴巻、高谷地区の子弟であ



▲二本松小学校の写真（佐藤正儀氏の所蔵）▲

ろうか。これは明治十六年に松岩小学校として老松小学校と統合された。平成二十五年五月十日にお電話にて、現・松岩寺住職の小黒沢子忻氏にご教示いただいたところ、現任職幼少の頃の松岩寺本堂の戸には墨にて当時の子どもたちらしい落書や学習内容が書き付けてあったという。小黒沢氏系が松岩寺の住職に付いたのは大正三年のことで、江戸末期、明治初期の寺子屋および松崎小学校時代のことは書面も含め残存していないという。



台の沢
（台の濱の岩月小学校跡）

また、岩月小学校については、「改訂・水沢縣下小学校開設について」

には、明治六年に岩月村に岩月小学校として創立され、これは岩月・台の濱に立地したとある。明治十七年には村内の小学校統合により階上小学校に併合となった。岩月小学校には現在の面瀬地区でいうと千岩田地区、下沢

地区、上沢二区、上沢三区の子弟が学んだと思われる。明治五年の学制を受けて明治六年に全国各地に小学校が創設されたが、それらは前述したように江戸期からあった寺子屋が基となった。「改訂・水沢縣下小学校開設について」によると岩月小学校の前身は「岩月村、塾主・佐々木祖恭、明治六年に閉塾。塾宅、台の濱（屋号「大台」の旧所有地）に新築し岩月小学校（水澤縣・第七大学区廿二番中学区第十四番小学校）」とある。

さて、平成二十五年五月十日午後三十周年記念事業名誉委員長・熊谷勝氏とともに面瀬地区・千岩田の熊谷勉氏の所有地の石碑を訪れた。これは、前面瀬地区振興会長の熊谷幹夫氏から岩月小学校の出自について貴重な情報をいただいております、その中に「明治初期の岩月小学校は同地にあったようだ。熊谷幹夫氏の自宅は一部その小学校を解体したときの木材を使用した。」とのことだった。そして、熊谷勝氏によるとその熊谷勉氏所有地に石碑があり、幼少のころはよくその石碑に供養した、とのことであった。

この日その地に立った。石碑は間違いなく熊谷文太郎氏宅の入り口路（じようぐち）から三メートルの右側の雑木林の中にあつた。しかし、東日本大

震災によってだろうか石碑正面を下にし裏書きを上にしてうつ伏せに倒れていた。重さは二百キロ近くであろうか。二人して雑木林の中で起こすにはどうてい無理である。いたしかたなく岩月・千岩田の熊谷信雄氏の経営する熊谷建材事務所に立ち寄ると「石碑を重機で起こしましょう。」ということになり、石碑の正面を確認することができた。その石碑は墓石であつた。



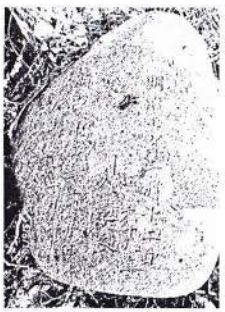
▲重機で墓石を移動▲

「熊谷衛純（右行）。三東温女（左行）写真参照」とあつた。墓石の裏には「門人建之・もんじん、これをたてる」とあり熊谷衛純は師であり、弟子・門人がこの墓碑を建てたことは明確である。ただし、石碑裏面、右二行に「明治七年一月十二日。（改行）六十八年」左二行に「明治二十四年一月



▲石碑写真表面▲
熊谷衛純<右行>
三東温女<左行>

廿日。（改行）
八十九年」
とある。
すると塾



▲石碑写真裏表面▲
明治七年一月十二日
六十八年
明治二十四年一月廿日
八十九年

主・佐々木祖恭とは違ってきて、さらに推測を広げざるを得なくなった。一つは、考えにくいがこの熊谷衛純は門人から墓碑を建ててもらったが、寺子屋とは関係ない人物か。二つは、岩月小学校前身というこの熊谷勉氏宅の寺子屋と佐々木祖恭の塾とは別のもので、この二つも含めて、岩月村内の寺子屋が併合して岩月小学校として創立されたか。三つ目は熊谷衛純は佐々木祖恭の塾の関係者か佐々木以前の塾員か塾頭であったのか。岩月小の出自については推定するしかない。そのことの解明の一助として階上村誌には、三河出身の仙台藩医の子、小野道純が大島にて私塾を開いていたが縁あって千刈田家に招かれ分家扱いとされ「熊谷」姓をもらい医のかたわら村内の子弟に学問を授けていたという。その妻は鮎貝家の従医である三東家より迎えたのである。とすれば門弟が建てた墓碑の左行は妻の名前と推察される。そう考えると道純は明治二十四年一月廿日に八十九歳で死去。妻の温女は明治七年一月十二日。六十八歳で死去と言えまいか。いずれにせよ、面瀬小学校史は今後とも解明の余地大いにありということだろう。



▲石碑を前に勝氏と信雄氏▲